

令和元年6月25日現在

機関番号：83501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K14368

研究課題名（和文）富士山における山小屋建築の原初形態とその建築的発展に関する史的研究

研究課題名（英文）Original Form and Development of Mountain Huts on Mt. Fuji

研究代表者

奥矢 恵（Okuya, Megumi）

山梨県富士山科学研究所・その他部局等・研究員

研究者番号：40771689

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、富士山における山小屋建築を対象にその原初形態と発展過程、変容について調査した。山小屋は祠堂、あるいはその付属屋として派生した。なかでも、焼山と呼ばれた厳しい自然環境下に成立した石室は修行の場であり避難所でもあった自然の石窟を原初形態とし、板小屋を噴石や溶岩で覆うようにして造られたが、昭和の高度成長期までに石積みを減じて近代化したことが明らかとなった。

さらに、近世の主たる4登山道における山小屋建築の所有・所在と形態を比較した。富士山の神聖性は、各々の登山口集落の形態が連続する草山・木山の茶屋に対して、焼山と一体化し共通した形態をもつ石室群によって表徴されたことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本では古来より山地が信仰の対象とされ、なかでも近世には庶民が講を組織して高山の山頂をめざしたが、その登拝活動を支えたのは山小屋の存在であった。従来の建築史研究では山岳信仰にまつわる寺社や麓集落が着目され、また民家史研究では主屋に主眼が置かれ、小屋という類型は看過されてきた。本研究は、近世以前に遡る山岳信仰にねざした山小屋建築として、富士山の、特に高山域（焼山）における石室に着目し、その歴史的・文化的・建築的意義を明らかにした。

世界文化遺産である富士山は現在、山小屋の修景に課題が指摘されている。山小屋建築の将来像を模索する上で本研究の成果が果たす役割は大きく、今後はその還元にも力を注ぎたい。

研究成果の概要（英文）：This study examined the original form and development of the mountain huts on Mt. Fuji. They were basically the attached huts around temples and shrines or themselves. The stone huts (ishimuro) which were built in the harshest area called "Yakeyama" were originally the natural cave used as religious practice places or shelters. They had been transformed to the wooden huts covered with cinders or solidified lava and modernized without stones by the period of high economic growth in the Showa era.

In addition, this study analyzed the ownership, the location and the form of the mountain huts on 4 main trails used in the Edo era and compared them. The teahouses (chaya) which were built in the areas called "Kusayama" and "Kiyama" had the same roofs as temples and shrines or houses in the village of each trail. On the other hand, the stone huts in Yakeyama had the unified form on all trails. The manner of the huts' existence made the stone huts a symbol of worship ascents on Mt. Fuji.

研究分野：建築歴史・意匠

キーワード：山小屋建築 山岳信仰 富士山 吉田口登山道 石室 茶屋 近代化 山岳景観

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本では古来より山地が信仰の対象とされ、なかでも近世には庶民が講を組織して高山の山頂をめざしたが、その登拝活動を支えたのは山小屋の存在であった。しかし、従来の建築史研究は山岳信仰にまつわる寺社や麓集落に着目してきた。また民家史研究では主屋に主眼が置かれ、小屋という類型は対象とされなかった。近年、山小屋に関する建築史・意匠研究が始まったが、その対象は明治期に外国人登山家が切り開いた近代登山にまつわる山小屋である。近世にさかのぼる山岳信仰にねざした山小屋は看過されてきた。

(2) 日本を代表する山岳信仰の対象：富士山は平安期に遡る登拝の歴史をもつが、昭和39年の富士スバルライン開通に始まる五合目へのモータリゼーション導入を機に建て替えが進んだ。その結果、世界文化遺産登録に際して山小屋には修景的課題が指摘され、信仰の歴史をふまえた保全計画が求められている。

2. 研究の目的

本研究は、富士山における山小屋建築の原初形態と発展過程、変容を明らかにすることを目的とする。なかでも、近世後期の富士講の隆盛によって現在まで最多の登山者を迎えてきた吉田口登山道（山梨県）を主な対象とし、最も苛烈な山岳環境下に成立した「石室」に着目する。

3. 研究の方法

近世から現代までの史資料調査、全登山道の踏査による現地確認と現存する山小屋の実測調査、山小屋関係者への聞き取り調査を行った。

4. 研究成果

(1) 近世における吉田口登山道の石室を中心に、山小屋建築の原初形態と成立過程について検討した。

まず、山小屋の成立過程を把握した。近世以前、五合目（天地境）下に中宮の社が造営された。近傍には、神仏を祀るとともに水などを商い登拝者を休息させる中宮小屋（図1）が派生、御師や百姓らによって運営された。やがて信仰観の変化や山役銭の徴収制度の変更に伴い、五合目上へ山小屋が創設されるようになった。これら石室は以前から山内に祀られてきた祠や堂を基盤とし、中宮小屋と同様に、水場や釜場（炉）を付加し居間（土間+筵）を拡大させ、泊まり屋として整備されたものと推察される。富士講が隆盛する以前の近世初期には、既にこうした石室が山内に存在し、それらは現在の山小屋とも概ね共通する要所に立地していた。草山・木山・焼山という富士山の信仰上の境界や登山道の合流点の付近には、山小屋が集中して建てられた。

次に、五合目以上の石室の建築形態について把握した。石室は自然の石窟を利用した修行の場を原初形態とし、石窟型（図2）と建屋型（図3）があった。建屋型の石室は木造軸組構造に羽目板を張った平入の小屋で、切妻の板葺き屋根の上と壁の周囲に噴石を積んだ。祠堂を別棟にもつものと石室の一部に設けるものがみられ、後者は正面を登山道に向けるものと内部の居間に向けるものがあつた。石室は祠堂であり、かつ避難所であつた。中宮小屋は木山に立地したが、五合目以上の石室は焼山と呼ばれる過酷な環境に立地する。石室は「板屋」である中宮小屋の建て方を基盤にして、山小屋付きの強力（登拝者の荷を背負い案内する者）らによって建てられ、焼山に有り余る噴石を用いて自然の脅威に対する防御性を発展させることで成立したと考えられる。

さらに、石室の規模の発展を把握した。石室は勾配のきつい傾斜地に建つため、奥行（梁行）よりむしろ登山道に沿って間口（桁行）方向を徐々に拡大した。祠を思わせる方丈、もしくは間口3間から近世後期には間口5～8間となった。厳しく、限られた土地では間口を拓げるにも限界があつたと推察され、大行合（現在の本八合目、須走口登山道との合流点）のように石室の数を集中し漸増する登拝者に対処した要所もあつた。一方で、御山を管理する御師や百姓らによって石室間の平等性が重要視され、山内の立地に応じて規模の統一が図られたとも考えられる。

吉田口五合目以上の山小屋建築は、近世以前に成立した中宮小屋を起源としてこのように天地境の上で成立し、石室となり、近世後期にかけて富士講の隆盛とともに発展した。

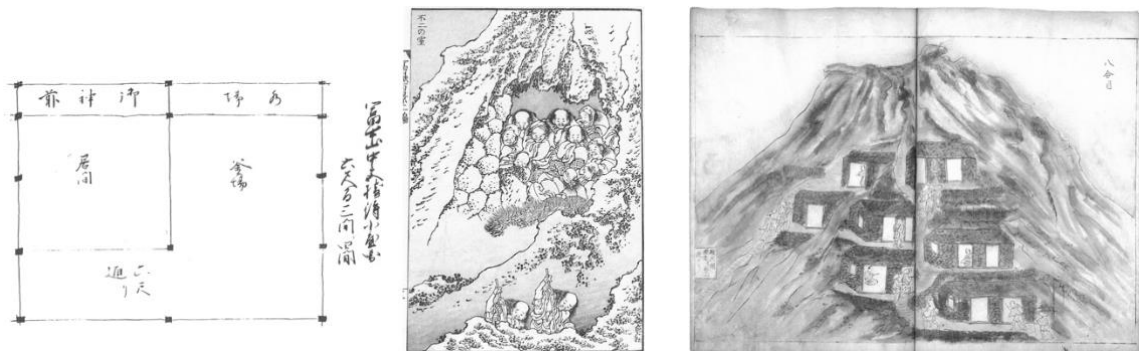


図1『富士山中宮接待小屋絵図』 図2『富嶽百景』, 「不二の室」 図3『富士山明細図』, 「八合目」

(2) 吉田口登山道を対象に、信仰（登拝）から観光（登山）への変革が進んだ明治・大正期において、八合目に創出された近代建築としての山小屋と近世からの形態を継承した石室という対比的な対象を通して、石室が近代化を遂げるまでの経過とその背景を明らかにした。

まず、石室の敷地規模の拡大を把握した。明治に入り、神仏分離令や御師職廃止のもとで富士講は再編され、登拝は続いた。明治8年には引き続き石室の営業が許可され、その小屋敷（敷地）は近世後期の立地や規模を継承していた。新たに設立された教派新道の富士信仰者による登拝は昭和初期にかけて拡大^{注1)}、加えて、明治中期以降に始まる鉄道整備や観光開発によって多様な登山者が急増する。大正15年には、五～六合目や八合目など、大半の登山者が下山・宿泊する山内要所の小屋敷が拡大する一方で、微増に留まる七合目付近でも一部に小屋敷を拡大するものがみられた。これらの石室が、小屋敷とともにその建物規模も拡大したことを一部に確認した。

次に、石室の建築形態の変化について把握した。明治・大正にかけても大半の石室は近世からの形態を継承した。しかし、大正中期にはごく一部で、登山道に面するファサードを掃き出し窓で構成する開放的な外観へ変化するものが現れた。

さらに、石室が近代化する契機となった山小屋の存在を把握した。明治28年に建設された野中到の山頂気象観測所は、科学者の目によって旧来の石室建築を分析し、冬季の長期滞在に耐えうるよう設計が加えられた。風除室、壁の断熱法、棚状の寝台などは後述する富士山ホテルに先んじて採用された。また、明治40年に建設された富士山ホテル（写真1、図4）は、石積みを用いない外観、堅牢な構造、排煙・採光設備や二段ベッドなど諸処に新たな試みを採用した。旧来の石室から飛躍した近代化の標本とも言える山小屋は、近代登山に慣れ親しんだ山梨県知事武田千代三郎と技師という専門家によってもたらされた。こうした諸施設の改善・整備に呼応したのは、登拝から登山への変化を察して早くに宿坊から近代旅館へと転身をはかった御師の一派や近世から商いで成功した地元の有力者たちであった。官民が一体となり、富士山吉田口に「近代建築としての山小屋」が実現した。

近世を通じて吉田口の山内権利を有し、石室を所有・管理したのは御師や御師業に関わる百姓であった。明治期には彼らとは立場や発想を異にした人々が科学や技術という観点から石室を分析して改めた。特に、明治40年には富士山を世界的観光地にしようとする外発的動機が揺さぶりをかけ、慣習に基づいて造られてきた石室を全く異なる近代的な建築物に変え、八合目に模範山舎を具現化した。武田県知事が意図したように、模範山舎に倣って石室群が自発的に近代化を推し進めるには至らなかったが、関東大震災後には再び県や村とともにホテルに関わる新興の人々が八合目へ郵便局を復旧、洋小屋を導入した。このようにして、近世後期、御師らによって保たれた石室間の平等性は明治・大正期を通じて徐々に無効化し、個々に近代化へ歩み始める素地が形成されたと考えられる。



写真1 『吉田口八合目富士山ホテル』

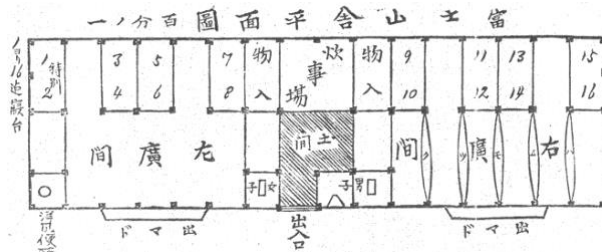


図4 富士山ホテル平面図

(3) 吉田口登山道を対象に、太平洋戦争以前から昭和39年に富士スバルラインが開通するまでの石室の近代化の過程とその実相を明らかにした。

まず、古絵葉書・古写真からファサードの変容を分析した。大正期を通じて石室は徐々に規模、特に間口を拡大したとみられるが、戦後までには間口・奥行ともに拡大、外壁には多数の石室が腰窓を設け、半数が石積みを除去して木やトタンの板壁に変更したことを明らかにした（写真2）。

さらに、申請図書の分析によって、昭和27, 39年、富士登山への本格的なモータリゼーション導入を機に、半数以上の石室が建て替え、あるいは増改築したことを明らかにした。建て替え、増築の場合には洋小屋が導入され、軒高・棟高を上げ、内部に柱をもたない広間が実現した。旧来からの石室も改築によって二段ベッドを設け、一層増加する登山者の宿泊に備えた。自家発電や給水濾過など設備導入も進められ、登山者の安全や衛生への配慮がなされた。また、戦前・戦後の工事仕様書の比較より、構法の細分化と多様化によって、元来、簡易な構造物であった石室が戦後には複雑化したことを把握した。一方で、資材（山林）の管理や搬入手段は未だ近代化の過渡期にあり、これらに影響を受け、山小屋の規模や建て方に差異が生じていることを実測調査（表1）より把握した。また聞き取り調査より、一部の山小屋が仮設式であったことを把握した。

吉田口の石室の近代化は、このように、近世より富士山の山小屋の代名詞であった「石室」を脱する様相をもった。石積みを除去し、洋小屋を採用して開放性や利用上の自由度を高め、構法を複雑化した。これらの変化は大正後期から徐々に進み、昭和初めの国立公園指定を経て、30年

代の高度成長期に一気に舵が切られた。昭和30年の富士登山者の実態調査^{注1)}では、信仰動機による登山者が2%にとどまり圧倒的な観光化の実態が山小屋建築にも表れた。

明治40年には富士山の国際的観光地化をめざし、理念的また外発的に八合目の一点に近代化がもたらされた。昭和に入り、戦前からの国立公園指定をにらんだ富士北麓全域の観光化の動き、戦時下の心身鍛錬と戦勝祈願、戦後のモータリゼーション導入を経て、富士登山は一層の観光化・大衆化が進んだ。こうした時代背景を受けて、更に多くの登山者を迎えるため、より現実的で合理性をもつ近代化が山小屋主たち自らによって積極的に進められた。

表1 実測調査を行った山小屋

登山道	合目	標高	名称	工事時期・内容	調査日
山頂	—	3,706m	東京屋 売店棟	昭和30～40年代 建て替え	2016年7月29日
吉田口	七合目	2,700m	花小屋	昭和35年 既存の半分を建て替え+半分を改築	2016年8月4日
吉田口	七合目	2,720m	日の出館	昭和27年、昭和33年 建て替え、さらに増築	2016年8月4日
吉田口	本八合目	3,400m	富士山ホテル 別館	昭和36年 建て替え	2016年8月5日
吉田口	本八合目	3,400m	富士山ホテル 第2本館※	昭和54年 大正期建設の一部を残し建て替え・増築	2016年8月5日
富士宮口	本七合目	3,010m	山口山荘	昭和32年 建て替え	2016年8月15日
御殿場口	七合五勾	3,050m	わらじ館	昭和30～40年代 前所有者より入手	2016年8月16日
須走口	新七合目	2,920m	太陽館	昭和55年頃、平成元年 広間・厨房建て替え、ベッド棟建て替え	2018年10月9日

※大正期建設の一部のみ調査した。



写真2 『吉田口七合目』

(4) 吉田口登山道において山小屋建築の変容が進んだ3期、すなわち、富士講の登拝により隆盛した近世後期、富士スバルラインが開通した昭和39年前後、環境配慮型トイレが導入された平成15～18年頃を対象に、山小屋の周辺環境を構成する要素とその配置について検討した。

近世後期、草山・木山の茶屋は様々な信仰対象物や登山道を構成する要素とともに登拝を彩った。一方、神聖、かつ苛烈な山岳環境となる焼山の石室は構成要素に乏しく配置も単調であった。富士スバルライン開通を契機に石室の建て替えが進んだが、主屋以外には小規模なトイレが1棟現れる程度に留まった。しかし、平成15～18年頃には環境配慮型トイレと関連設備の付属屋や水槽が急増した。付属屋は山側の主屋を拡大するように、あるいは谷側にまとめて配置され、山岳景観が激変したことが明らかとなった。

(5) 山小屋の基盤的形態が形成された近世に立ち返り、吉田口登山道とともに、近世以前から登拝された大宮・村山口、須山口、須走口登山道と頂上を対象に、登拝者を休憩・宿泊させた山小屋（茶屋・石室）の所有と山内における所在（表2）、それらの形態について把握した。

遅くとも、修験によって栄えた大宮・村山口では近世以前より、他の登山口でも近世初期には多くの山小屋が存在した。宝永噴火や雪代等の自然災害を再三受けながらも、庚申御縁年による登拝者の増加に応じるように、村山三坊や御師など支配層が合議によって計画的に山小屋を配置し、麓の百姓らによって営まれた。

茶屋は草山・木山に、石室は焼山に設けられた。大宮・村山口と須山口、須走口と吉田口には山小屋の呼称や所在に類似がみられ、前者では修験者の修行の拠点として、後者では大衆の登拝拠点として発展したことがその背景にあると推察できる。また、茶屋は各登山口を支配する者らの身分や麓の家屋に相応した形態をもち、麓から草山・木山へと連続したが、石室は登山道によらず統一的な形態をもち、焼山の地質・地形と連続した。

このように、近世富士山には、焼山の領域に象徴性の高い山岳景観が存在した。これは、山岳の自然環境、信仰形態、麓集落とその支配層の性格、宝永噴火に代表される自然災害など、登山道ごとに諸相が関連し築き上げられた山小屋が群となって形成したものと考えられる。

表2 主たる4登山道における山小屋の所有と所在

	大宮・村山口	須山口		須走口	吉田口
		宝永噴火前	宝永噴火後		
所有 管理 普請	村山三坊			御師、名主、 組頭、百姓	御師、百姓
	百姓				百姓
	先達の寄進				講社の寄進
	麓の大工				麓の大工（強力）
所在	頂上 8軒			石室 16軒	
	焼山 [1-9合目] 石室 24軒?	[3-9合目] 石室 7軒	[1-9合目] 石室 5軒	[頂上直下] 石室 2軒 [1-8合目] 石室 16軒 茶屋 2軒	[5-8合目] 石室 13軒
	草山 茶屋 7軒? 茶屋 1軒	[1-3 sta.] 石室 3軒		御供小屋 2軒 茶屋 3軒	[1-5合目] 御供所 3軒 茶屋 8軒
	木山				茶屋 1軒

--- : 1合目 ■ : 中宮

(6) 近世、唯一、寺社によって支配された大宮・村山口と頂上における山小屋建築の近代化について検討した。

神仏分離令発令後、浅間大社の支配下で富士信仰の形態は変わりつつも登拝は続けられ、山小屋は存続された。しかし、明治 23～25 年頃と 40～42 年頃には山麓への鉄道開通を見越した新たな登山道の開削により登山口町村間の競争が激化し、山小屋に変容が促された。さらに、これまでの支配層とは異なる県や国による統制が山小屋に影響をもたらした。こうした状況下においてもなお、須走村が管理する頂上久須志神社脇の石室の多くは近世に遡る御師の家系の者らによって営まれたが、頂上奥宮の石室や大宮・村山口登山道の山小屋は近世に権利を持った者らから合資会社という近代的組織へ代わって営まれた。合資会社は石室への設備改善を行ったが、明治 40 年に山梨県が吉田口の本八合目で実現したような抜本的な近代化には至らず、石室は近世以来の旧態を保ったことが明らかとなった。

(7) 富士山と同じく、山岳信仰にねざし、近世より講によって登拝されてきた御嶽山と那須岳の山小屋建築についても史資料調査・実測調査・関係者への聞き取り調査を行った。

御嶽山においては「中通り型」や「両小屋型」と呼ぶような特徴的な平面構成の存在を確認した。これらは杣・日用という木曾谷の生業に関連した小屋、あるいは籠り堂という山岳信仰に関連した小屋に由来すると考えられる。5 軒の山小屋の実測調査より、この平面構成が現在も継承されることを確認した。また、那須岳においては湯の信仰にねざす湯治場（温泉旅館）として山小屋が成立しており、街道沿いの旅籠の建築の影響が考えられた。

出典 図 1：田辺四郎家蔵、 図 2：葛飾北斎、天保 5～6 年（1834-1835）、山梨県立博物館蔵、 図 3：小澤隼人源寛信、天保末～弘化（1840-1845）、本庄雅直家蔵、 図 4：山梨日日新聞、明治 40 年 6 月 16 日付「富士山と県の設備（下）」、写真 1：萱沼進蔵、 写真 2：静岡県富士山世界遺産センター蔵（小林謙光コレクション）

注 1)山梨県教育委員会、『山梨県富士山総合学術調査研究報告書』, pp. 31-38, 2012

5. 主な発表論文等（研究代表者は下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

- ① 奥矢恵, 大場修, 近世富士山における山小屋建築の諸相と山岳景観, 日本建築学会計画系論文集, 査読有, 第 84 巻 第 756 号, 2019, pp.465-475
DOI: 10.3130/aija.84.465
- ② 奥矢恵, 大場修, 富士山の吉田口登山道における山小屋建築の近代化のおこり, 日本建築学会計画系論文集, 査読有, 第 83 巻 第 746 号, 2018, pp.745-754
DOI:10.3130/aija.83.745
- ③ 奥矢恵, 大場修, 富士山の吉田口登山道における山小屋建築の近代化の様相, 日本建築学会計画系論文集, 査読有, 第 83 巻 第 744 号, 2018, pp.297-305
DOI: 10.3130/aija.83.297
- ④ 奥矢恵, 大場修, 富士山の吉田口登山道における山小屋建築の成立過程とその形態, 日本建築学会計画系論文集, 査読有, 第 82 巻 第 739 号, 2017, pp.2383-2392
DOI: 10.3130/aija.82.2383

〔学会発表〕（計 11 件）

- ① 奥矢恵, 大場修, 湯の信仰にねざす山小屋建築-那須岳三斗小屋温泉大黒屋の調査報告-, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2019
- ② 奥矢恵, 大場修, 大宮・村山口登山道と浅間神社境内地における山小屋建築の近代化-富士山の山小屋建築に関する研究 (10), 日本建築学会関東支部研究報告集 II, 2019, pp. 571-574
- ③ 奥矢恵, 大場修, 吉田口登山道における山小屋の屋敷構え-富士山の山小屋建築に関する研究 (9), 日本建築学会関東支部研究報告集 II, 2019, pp. 567-570
- ④ 奥矢恵, 大場修, 神社に付属した茶屋から山小屋への変遷-富士山の山小屋建築に関する研究 (8), 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2018, pp. 667-668
- ⑤ 奥矢恵, 大場修, 御嶽山における山小屋建築の成立過程とその形態-御嶽山の山小屋建築に関する研究 (1), 日本建築学会関東支部優秀研究報告集, 査読有, 2018, pp. 207-210
- ⑥ 奥矢恵, 大場修, 近世期の主たる登山道における山小屋建築の形態-富士山の山小屋建築に関する研究 (7), 日本建築学会関東支部研究報告集 II, 2018, pp. 615-618
- ⑦ 奥矢恵, 大場修, 近世期の主たる登山道における山小屋建築の所有と所在-富士山の山小屋建築に関する研究 (6), 日本建築学会関東支部研究報告集 II, 2018, pp. 611-614
- ⑧ 奥矢恵, 大場修, 昭和 30 年代に建設された現存する山小屋について-富士山の山小屋建築に関する研究 (5), 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2017, pp. 69-70
- ⑨ 奥矢恵, 大場修, 吉田口登山道における山小屋建築の近代化の様相-富士山の山小屋建築に関する研究 (4), 日本建築学会関東支部優秀研究報告集, 査読有, 2017, pp. 227-230
- ⑩ 奥矢恵, 大場修, 吉田口登山道における山小屋建築の近代化のおこり-富士山の山小屋建築に関する研究 (3), 日本建築学会関東支部優秀研究報告集, 査読有, 2017, pp. 223-226
- ⑪ 奥矢恵, 大場修, 吉田口登山道における山小屋建築の成立過程とその形態-富士山の山小屋建築に関する研究 (2), 日本建築学会関東支部優秀研究報告集, 査読有, 2017, pp. 219-222

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

研究協力者 なし

〔主たる渡航先の主たる海外共同研究者〕

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

〔その他の研究協力者〕

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。